

ネパール王国は北縁に標高8000m級の山々が立並ぶヒマラヤが、南縁にはインド平原に続く標高数100mのトライ平原があり、この短い区間にマハバラット山脈、シワリク山脈が介在する非常に起伏に富んだ地形を有している。ヒマラヤの頂上部から北側は古い地質時代の海ターティス海の堆積岩で覆れている。地図で見るとインダス川、ガンジス川の源流はヒマラヤの背後に発しているがヒマラヤ山脈の隆起運動のため西進または東進を余儀なくされヒマラヤをかかえ込むようにとどまり流れている。一方ネパール国内を流れる諸河川は隆起運動を上回る速度で下刻作用を続けてきておりその結果概して南北方向に流れを保っている。しかし河状は当然のことながら深い峡谷をなしており降雨のたびに河岸沿いの段丘では大規模な崩壊が発生している。

ネパール王国は発展途上国の中でも特に最貧国グループに分類されほぼ貧しい国である。有力な天然資源がないために全国土面積(141000km²)の72.9%が山地面積であるという地勢にもかかわらず全人口(1160万人)の93%の人々が農業に依存して自給自足の生活を送っている。

この国を対象とした経済・技術援助活動は現在国連の各機関(UNDP, FAO, UNICEF等)をはじめインド、アメリカ、ソ連、中共、西ドイツ、スイス、イギリス、カナダ等の国々が各分野で実施中である。日本も国際協力事業団が医療・農業・水力発電等の分野に技術協力のための専門家や海外青年協力隊員を派遣して物心両面にわたって協力中であるほか民間人による献心的な奉仕活動(岩村昇医師他)や各種学術調査も行っている。

1974年8月森林省内にDepartment of Soil and Water Conservation(略称D.S.W.C.)が新設されたが当時国民は、政府が自然災害への対処の仕方について従来の赤十字による被災者救済活動や灌漑施設維持を目的とした消極的な対応から人命・財産を保護するために災害の原因除去(植林や治水事業をいう。)を目的とした積極的な対応へと転換したものと解釈し歓迎したこのことである。

被害の程度は例えは1975年の雨期には被災世帯数11295農地の被災5220ha、被災家屋数2600死者116人家畜の損失539頭があったと報告されている。因にD.S.W.Cの1977年度の事業費は約2億2,000万円である。

私が防災事業の分野の派遣専門家としてこの国に滞在したのは1977年9月末から1978年10月末までの1年1ヶ月であった。D.S.W.C.ではネパール人のほかに諸外国の技術専門家、ボランティアが20人位働いていた。これらの人々は国連機関やアメリカ、西ドイツ、スイス等から派遣されて来ており多くの場合本国からの経済援助が行なわれているプロジェクトサイトで技術協力している。

私の技術協力活動の成果はD.S.W.C.で働くネパール政府役人達と共同で作成したプロジェクト提案書「National Soil and Water Conservation Research, Demonstration and Education Project」に集約されていると言っても過言ではない。内容は題名から容易に推察していただけるものとするが提案書の作成に当たって日本の治水・治水事業の経験、特に淀川流域に於ける防災事業の発展の過程が良き指針となったことを付言して結びとする。

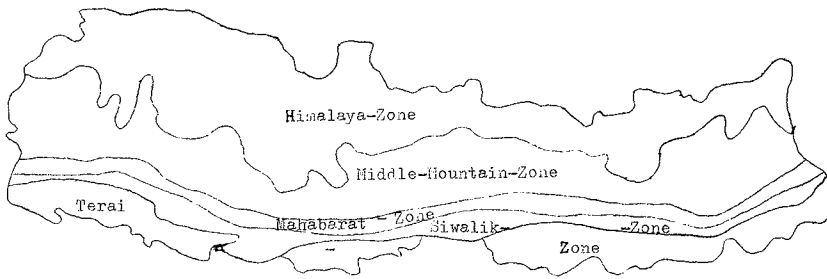


Fig. 1. Ecological Zones of Nepal

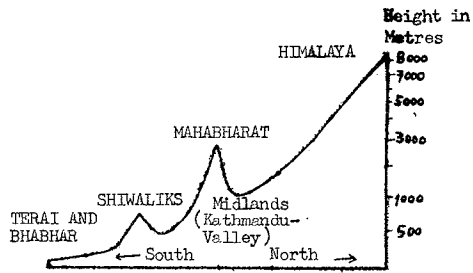


Fig. 2. Cross Section of Nepal in N.S. direction.

Fig. 3 Map of Nepal Showing Different Project Areas of DSWC

